

第6章 まとめ

本研究は、非行・犯罪からの立ち直り（デシスタンス）の過程を解明し、立ち直りを促進する要因を見いだすため、少年院出院者を長期間追跡した調査の結果に分析考察を加えたものである。この追跡調査は、成行き調査、質問紙調査、面接調査の3つの異なる手法の組み合わせにより約4年にわたって実施され、質問紙調査では少年院出院者に加え、一般青少年からも協力を得た。

本章では、今後のより効果的な矯正教育や保護観察処遇の在り方、あるいは保護観察終了後の新たな支援策等の検討に役立てるという観点から、研究を通して得られた実証的な知見をまとめて示す。

1 介入のタイミング

成行き調査の対象となった少年院出院者の8割は、出院後約4年経過した時点で、少年院に再入院することも、刑事施設に入所することもなかった。一方、再入院等（少年院再入院又は刑事施設入所）した者を見ると、出院後半年から1年で急に増える時期があることが分かった。非行行動から少年院入院までには、手続上一定の時間がかかることを考えると、少年院出院者に対しては、出院後間もない時期に集中的な指導監督や支援を行うことが重要である。

2 個別の属性・特徴と処遇の在り方

成行き調査の対象となった少年院出院者が、再入院等せずに立ち直るかどうかについては、性別、年齢、少年院に入った事件の非行名、初発非行の時期、少年院で賞又は懲戒を受けたかどうか、少年院を出る時に家族との生活に不安を感じていたかどうかによって差が出ていることが分かった。これらの属性や特徴には、固定的で変えられないものと、処遇を通じて変えることができるものがある。

まず、立ち直りに影響する要因のうち変えられる特徴について見ると、少年院で賞を受けた者、少年院で懲戒を受けなかった者、そして出院時に家族生活に不安を感じなかった者が立ち直りやすい。少年院で賞や懲戒を受ける者はそもそも資質面で差があるというような、別な要因が影響している可能性もあるが、賞を通じて在院者の良い行いや努力を評価し、良い行いや努力を強める処遇を少年院が実践していることは、賞を受けた在院者に良い結果をもたらして

いると考えられる。

また、出院時に家族生活に不安を抱えていたかどうかは立ち直りを左右するという結果からは、非行からの立ち直り支援における家族関係の調整が重要であることが改めて確認できる。

次に、立ち直りに影響する固定的な属性・特徴を見ると、立ち直りにくいのは、男性、年少少年、非行名が窃盗、中学入学以前に初発非行があった出院者であり、出院後の継続的な手厚い処遇が必要と考えられる。ただし、属性によっては、再入院等のリスクが高まる時期に一定の傾向が見いだされ、時期に応じた集中的な処遇を行うことが有効と見られる。具体的には、年少少年では、出院直後に加えて18歳前後の時期にもリスクが高まることから、この時期に重点的に処遇を行うことが有用と考えられる。

3 生活状況と心理的な特徴

質問紙調査の対象となった少年院出院者のうち、良好に立ち直っている者（デシスタンス群）の生活状況や心理的な特徴を、再入院した者（再入院群）、一般青少年（一般群）と比較した結果、以下のような点が見いだされ、少年院出院者への処遇で留意すべき点も浮かび上がった。

(1) 生活状況

デシスタンス群は、その一部に調査時において成人となった者を含むにもかかわらず、再入院群と比べ、飲酒・喫煙の習慣が少ない。処遇にあたり、飲酒や喫煙を小さな逸脱行為と見逃さず、根気強く指導することが重要であると見られる。

デシスタンス群、再入院群とも、就労している者が過半数で顕著な差は見られなかったが、就学中の者はデシスタンス群に多い。ただし、一般群と比べると、両群とも、仕事や学校を続けることに困難を感じている者が多く、就学就労を継続するための支援の必要性が認められる。

デシスタンス群は家族に肯定的感情を持ち、接触機会は頻繁で、家族からのサポートも感じている。一般群と共通して家族関係は良好であり、再入院群とは差がある。一方で友人関係については、それまでの不良交友を絶ち、家族との関係に重きを置いたことが立ち直りを支えていると見られ、新たに適切な交友関係を築くための支援が望まれる。

(2) 心理的な特徴

デシスタンス群は、再入院群と比べ、自己肯定感が強く、自己の行動によって物事の結果を

変えることができると信じており、自分の行動を制御する力が高いことが見いだされた。これらの特徴は一般群と共通している。もともとの本人の資質を反映している可能性もあるが、自己肯定感を高め、自己統制力を身に付けさせるという少年院での処遇目標の正当性と処遇の有効性を裏付ける結果と考えられる。

4 親密な対人関係と社会的役割の達成

面接調査の対象となったデシタンス群の多くは、家族を始めとした重要な他者と親密な関係を築き、また就労就学等の社会的役割を達成することで、喜びと充足感を見いだしている。さらに、その多くが、親密な関係と社会的な達成が自らの非行からの離脱や離脱の維持を支えていると認識していることが分かった。

(1) 親密な対人関係

周囲の人との親密な関係がうれしかったというエピソードを語る際、再入院群が友人・知人を最も多く挙げているのに対し、デシタンス群は家族を最も多く挙げ、前項でも見られた家族重視の傾向が明らかである。本章2項とも重複するが、家族との良好な関係作りを支えることは、立ち直り支援において非常に重要と考えられる。

(2) 社会的役割の達成

デシタンス群は、再入院群に比べ、就学・就労等、社会的役割に関連する達成のエピソードを自分にとって良かったものとして多く挙げ、非行をしないでいられる理由にも関連付けていた。また、就学就労が家族等に喜んでもらえたことで本人にとっての意味を増したり、職場で本人を支える人間関係のおかげで就労に定着するといった、社会的役割の達成が対人関係の充実と相乗効果を挙げる例が見られ、両要因の相互関係についても処遇上留意する必要があるだろう。

5 内的な成長とそれを促す処遇

デシタンス群の心理的な特徴については3項(2)のとおりであるが、面接調査を通じ、物事をどのように認識し、捉えているかについても以下のような特徴があることが見いだされた。

(1) 過去の再構築と主体性の獲得

デシスタンス群は、少年院生活や保護観察を受けたことを、自分にとって総じてプラスの影響があったと受け止めている。プラスの影響として、自らの精神的な成長や、処遇担当者との良い関係性が多く挙げられていた一方、マイナスの影響として捉えつつも、それが無ければ今の自分はないとして、マイナスも含めた全体としての経験が、現在の良い自己の形成に関わったという認識になっているものが認められた。

また、「最低の経験」についての回答では、再入院群が幼少時の家庭における逆境的体验を多く挙げられていた一方、デシスタンス群では過去のつらい体験を述べていても、自分の行為が周囲に悪影響を及ぼしたことに着目し、それを最低と捉えるものが多かった。

マルナは、そのデシスタンス研究の中で、今後の見通しについて尋ねた場合、犯罪を続けている者はしばしば「宝くじを当てる」など、一山当てるという発想の回答をすることに着目し、その理由として、こうした人たちが「将来もたらされる結果に対しては、自分個人の力がほとんど及ばない (Maruna.S., 2001 津富・河野監訳 2013, p. 112)」と受け止めていることを挙げている。

将来を語る際も、再入院群は、非現実的な夢や、一山当てるといった空想を多く挙げており、一方で、デシスタンス群は、夢を実現するための小さな当面の目標を語る事が多く、段階的に一つ一つ積み重ねる過程が想定されていた。

デシスタンス群は、時間の経過とともに、自分の身に起こった出来事の意味を解釈し直し、過去を再構築する中で、無力で受身で状況に左右される自分ではなく、主体的で状況に働きかけることができる自分という自己像を獲得してきたことが推察される。

(2) 振り返ることの意義

デシスタンス群が面接調査に参加した理由として挙げた中で最も多かったのは、自分自身の振り返りの機会を持つため、ということであり、立ち直りの過程にある者の一部に、対話を通じてこれまでの自分の歩みを振り返りたいというニーズがあることが分かった。さらに、振り返りの意義としては、過去を振り返ることを通じ、自分の決意を確認して現在の糧にする、言語化することで新たな発見がある、などが挙げられていた。

(3) 内的成長を支える処遇の在り方

立ち直りの過程にあって、対話を通じて自分自身の振り返りを行いたいというニーズがある

者に対して、よく話を聴くことは当然であるが、さらに処遇者として留意すべき点は次のとおりである。

まず、処遇者による処遇対象者との関係作りの重要性である。先に、少年院や保護観察において処遇担当者との良い関係性がデシスタンス群からプラス評価を得ていたことを述べたが、その具体的内容は、本人に対する真摯な態度や、受容的な姿勢、「上からの物言いじゃなくて、同じ目線で言ってもらえる。」という対等な関係性等であり、参考となる。

次に、主体的な自己像を育てるための処遇者の関わり方である。過去のつらい体験と非行との関連が語られる際、その中でも本人が努力した点、成果には繋がらなかったとしても前向きに考えた点、今ならできること等を選択して打ち返し、過去の再構築を通じて本人が自分について解釈し直すのを助けることが有用であると考えられる。また、将来の夢に向かうための具体的過程を段階的なスモールステップとして設定し、一つ一つ乗り越えるたびに評価して自信を付けさせるという実践も役立つと見られる。

（４） その他の支援策

第1に、人的環境の整備が挙げられる。先に述べた家族関係以外に、2度面接調査に参加したデシスタンス群は、自分に良い影響を与えた出会いの相手として1度目の調査では少年院の教官や同級生を挙げたが、2年後の2度目の調査では、職場の先輩、同僚、学校教師を挙げ、その範囲が拡大している。

ベス・ウィーバーは、デシスタンスに関連する新しいアイデンティティの形成には、それを支える、社会的又は相互の繋がりネットワークである社会関係の構築が必要であるとともに、立ち直りつつある人にとっての社会関係資本の意味が重要であると考え、「既存の関係を修正することを通し、状況と行動の双方を変化させられるように、関係性やネットワークを支援することが肝要である」（Weaver, B., 2014, p. 12）と述べ、出会いの相手が本人にとって新しい人物でなくとも、新たな意味を持たば立ち直りを支えることを示唆している。

このことから、処遇者は、本人が自力で開拓できない場合、本人にとって新しい意味を持つ出会いが実現するよう支えることが望まれる。

第2に、出院後の困難を乗り越えるために役立つ、基本的な技能やスキルの習得を促す機会の提供である。デシスタンス群には、出院後、少年院で習得した対人スキルを活用している例が見られた。

6 今後の課題

以上、本研究で得られた結果は、少年院や保護観察において、処遇を担当する教官や保護司との関係を基盤とし、本人の内的な成長を促しつつ家族関係調整等の環境整備を進めるという、現行処遇の有用性を支持するものであった。また、おおむね先行研究とも一致する内容であった。

今後の課題としては、デシスタンスの定義及びデシスタンスを測定するための指標設定、デシスタンスのメカニズム解明のほか、長期的追跡調査に伴う調査対象者の減少にどう対処するかについても検討を継続する必要がある。

参考文献

- Maruna, S. (2001). *Making good: How ex-convicts reform and rebuild their lives*. Washington, DC : American Psychological Association. (マルナ, S. 津富宏・河野荘子 (監訳) (2013). 犯罪からの離脱と「人生のやり直し」元犯罪者のナラティブから学ぶ 明石書店)
- Weaver, B. (2014). Control or Change? Developing dialogues between desistance research and public protection practices. *Probation Journal*, 61(1), 8-26.